
義妹は生徒会長！ +Plus ~俺と義妹と双子の妹~

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹は生徒会長！ + Plus ～俺と義妹と双子の妹～

【Nコード】

N9521P

【作者名】

羽賀

【あらすじ】

神絢一。高校二年生。家族構成は海外赴任中の両親、双子の妹神理子、そして、苗字は違えども立派な家族、義妹の神楽坂観月。しかしこの妹二人に、絢一は振り回されっぱなし。果たしてどうなるお兄ちゃんライフ！ シスコン気味な主人公と、なんとなんとの大増量。妹二人で送る新しい『義妹は生徒会長！』がここにある！

000:プロローグ(前書き)

再び帰ってきました

000:プロローグ

六時限目の授業も終わり今日の日課はホームルームを残すのみとなった我が二年一組の教室は、開放感に包まれた生徒達の喧噪に包まれていた。

放課後の予定を話し合う者や、この後に控える部活動について思いを巡らす者、いそいそと帰り支度を始める者たち。そんな彼らに混じって、俺も机の中に仕舞い込んだ教科書類を適当に鞆へと詰め込んでいた。

俺は比較的不真面目な生徒なので、宿題の出された教科以外の教科書は全て机の中に置き去りだ。そのため、準備も早く終わる。

荷物を大体詰め終わりやることの無くなった俺は、視線を上げてクラス中を見渡した。俺の席は教室真ん中の列一番後ろにあるので、クラス全体を見渡すのにちょうど良い。

適当に視線を巡らせると、喧噪の中、一際大きな話し声が聞こえる区画を発見できた。

中心にいるのは一人の女生徒。皆に笑顔を振りまく彼女を中心に、五六人ほどの男女が楽しげに会話している。

目鼻立ちはこれでもかと言うほどに整っている少女だった。色素の薄く、毛先が若干内向きに流れたセミロングの髪の毛が印象的でよく似合っている。端的に言う则可愛らしい。

身体のバランスも取れていて、すらっとしたスレンダーな体型なに出ているところはしっかりと出ているという、誰もが羨むような体型だ。……俺は何を見てるんだ。ちょっと自戒する。

彼女の名は神楽坂観月^{かぐらざか みるき}。我が二年一組の誇る美少女で、我が黎桜学園の誇る学園のアイドル。

誰もが一目見て息を呑むほどの美少女であるにもかかわらず、彼女には人を遠ざけるような、美人特有の刺々しさが無い。

誰にでもその太陽のような笑みを向けることの出来る彼女の周り

には、当然人が集まった。集まるべくして集まったとも言おうか。彼女の周りに人が集まるのは当然。そう言い切れるほどの魅力、彼女は持っている。

さて。何故俺がこれほどまでに彼女を気にしたかと言えば、当然彼女が学園のアイドルで、高嶺の花で、非公式ながらファンクラブすら存在するレベルの美少女であるために見とれた。というわけでもない。

そう、俺と、神楽坂観月には誰にも言えないヒミツの関係がある。あ、少しいやらしいか。

ヒミツの関係などと言ったが、大した事ではない。このヒミツを暴露した時点で、俺の慎ましやかな生活が一瞬で灰燼と化してしまっただけ。

それほどまでに絶大な破壊力を秘めた、俺と彼女の関係は、

「よし、ホームルームを始めるぞー」

そこまで思いを巡らせていたところで、担任が間の抜けた声を出しながら教室へ入ってきた。

教室の至る所に散らばっていた学友も、己の指定席へと戻っている。当然、神楽坂観月の周りにいた面子もだ。

全員が席に到着したところで、しかし、俺の視界には一つだけ、持ち主の帰還を待つ席がぽつんと取り残されているのが映る。

それは廊下側最前列の席で、授業中絶対に寝ることが出来ないために『悪夢の指定席』と揶揄されている特別席だった。寝れないのに悪夢とはこれいかんと思っただが、大した事ではないだろう。

ま、ともかく。その席に本来ならば座っているべき人物がいない。担任は空席となっているその席を一瞥すると、やれやれと言わんばかりに嘆息し、一週間後に訪れるゴールデンウィークに向けての注意事項を伝え始めた。まるで、その席にいるべき生徒がいなくても当然と言ったような風体だ。

その生徒については俺にとって無関係ではないため、若干ムツと
してしまいが、ここで担任に喧嘩を売ってもしょうがない。実際、
彼女はそう思われるだけのことをしているし、してきているのだか
ら。

件の机の横にまだ鞆がぶら下がっていることを見るに、どうやら
俺のことを当てにしているらしかった。

担任の話を右から左に聞き流しつつ、俺は彼女へのお叱りの一言
をどうするか、思案を始めることにする。

「おい、あやかず 絢一」

いくつか候補を出し終えたところで、横合いから若干高めの声が
聞こえてきた。思考中断、名前を呼ばれた俺は、声をかけてきた友
人の方に顔を向ける。

隣の席に座っているのは、若干童顔で、しかし平均以上には顔の
整っている男だ。名を鈴木信之すずきののぶゆきと言う。中学時代から付き合いのあ
る俺の悪友で、中学一年の時から合わせて五年間同じクラスに所属
していることになる。腐れ縁ここに極まれり。

そんな悪友の信之は、俺の顔を見てニヤリと下卑た笑みを浮かべ、
右の親指でくいくい、と何かを示すポーズを取った。その先には、
担任の話を真面目に聞く神楽坂観月の後ろ姿。

「神楽坂がどうかしたのか？」

「お前、さっき見てただろ。じーっとさ」

ニヤニヤ笑いを止めず、信之が言う。どうやらぼけーっと神楽坂
観月とその周りの面子を眺めていたところはばっちり見られていた
らしい。おかしいな、こいつさっきまで机の下でゲームに興じてい
たはずなのに。

「何でわかったんだよ」そう目で問うと、信之は笑顔で一言。

「愛の力……かな」

「キメえ。死ぬ。鼻の穴から脳味噌ほじくり出すぞ」

「冗談冗談」

からからと信之は笑うが、愛の力だなどと不快なことを言われた

ことに変わりはないので、一発殴っておいた。

担任の話はまだ続いている。真面目にこの話を聞くの生徒はこの教室に一体どれだけいるだろうか。俺の予想では神楽坂観月一人だけだ。

「……で、どうして見てたのさ」

笑い終えた信之が、身を乗り出すようにして訊いてくる。何だ、何でそこまでこいつは拘るんだ？

「どうしてって……、今日も目立つなあ、ってな。それがどうかしたか？」

俺が返したのは当たり前障りのない解答だ。神楽坂観月は目立つ。とにかくよく目立つ。

成績はトップクラス、運動神経もトップクラス、教師陣からの覚えもよく、去年は一年生にしてテニス部のエース、拳げ句生徒会長にも上り詰めた才女だ。黎桜で知らぬ者はいないと言って良いほどに目立つ。

だから、傍から見ればその他大勢の一人である俺が神楽坂に見とれていても、何らおかしいことはない。ごくごく一般的な反応だ。

そんな思いを含ませ答えたのだが、信之の視線はどうも訝しげだった。

「それだけか？」

「それだけだ」

「お前は異性には無頓着な人間じゃなかったか？」

確かに、信之の言うとおりだった。俺はこれまでに異性を付き合うとか、仲良くするとか、そういう事を考えたことがあまりなかった。それに関して人並みに知識欲はあるが、いざ自分が行動を起こそうとは思えないのだ。

信之も、そんな俺の性格を知っている。だから怪しんでいるのだろつ。

「信用してないな、信之」

「当たり前だろ。平気で嘘をつくのがお前の特技だからな」

じとーっ、と粘つくような不快な視線が俺を射貫く。神楽坂観月にはファンクラブが存在するが、もしかすると信之もその一員で、俺が彼女に近づくことを未然に防ごうとしているのかもしれない。

神楽坂観月を眺めていたのにはそれ相応の理由があるのだが、それを伝えた瞬間俺の平和な学園生活が終幕を迎えるので何も言わない。

これ以上この議論を続けるのは無駄かつ危険だと悟った俺は、話題を廊下側最前列の席の持ち主にシフトさせることとした。

「それより、あっち。どう思う?」

無人の席を指さし、問う。

信之は釣られて視線を動かし、眉を顰めた。

「どう思うも何も……、ゆか榊ゆかについてはお前の専門だろ」

「ああ、いや、まあな。でもほら、一応中学時代の友人からの印象を聞きたくてさ」

「外見は可愛いです。けど怖いです」

何か嫌な思い出がフラッシュバックしたのか、肩を抱き、信之がぶるぶると震え始める。

やっぱりそんな印象なのか。どうにかしてやらないとなあと脳裏に件の人物を思い描いた俺は、信之との会話を打ち切り担任の話に耳を傾けた。

うん……やっぱり長いし意味ない。寝よう。

「榊くん、もう放課後ですよ」

ゆさゆさと、誰かに身体を揺すられる感覚。周りの生徒達が（主に信之が）息を呑むのが何となくわかった。

机に突っ伏し腕を枕に夢の世界へ旅立っていた俺は、ゆっくりと目を開く。傍らに立ち俺の肩を静かに揺すっている少女の姿が視界に映り込む。

窓から射し込む夕日を受けた彼女の横顔は、実に神秘的だった。美しい、という言葉だけでは足りないかもしれない。なにかもつと、

直接この感情を表現する手立てはあるだろうか。いや、おそらくないだろう。

絶対不可侵の聖域が、手を伸ばせばすぐ届く距離にあった。神楽坂観月が、俺を起こしてくれている。

「……放課後、か」

「はい、放課後です」

にこり。嫌味のないその笑みに思わず見とれそうになり、俺はぶんぶん頭を振った。後で信之に何を言われるかわかったもんじゃない。

俺は立ち上がり、机の横に提げられている鞆を手にとって神楽坂観月に相對した。俺よりも頭一つ分ほど低い身長。自然見下ろす形になり、上目にこちらを伺う彼女の姿がまた庇護欲を刺激する。ええい、邪念は追い出せ俺。

「起こしてくれてありがとう、神楽坂」

「クラスメイトとして当然ですよ」

神楽坂観月が微笑む。俺だけに向けられたその笑みに、視界の外で信之が齒軋りしているのだけは感じ取れた。おそらくあいつは明日からホームルーム中に寝始めることだろう。

「わざわざありがとな。それじゃ、またな」

俺はもう一度彼女に礼を告げ、その脇を通り過ぎる。その瞬間、彼女が小さく呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

「……はい、また……後で」

若干照れたように、俯きがちに彼女は言う。

その台詞が、誰にも聞かれていないのを願うばかりだ。

十

廊下側最前列『悪夢の指定席』に提げられていた鞆を手に、俺は昇降口のある一階とは全く逆の方向、つまりは屋上へ向けてその足を進めていた。

いつものことだ。屋上に、『彼女』はいる。

屋上へ向かう階段を登り切り、若干錆び始めてきた鉄の扉を勢いよく押し開ける。

途端、目の前にはあかね色に染め上げられた美しい夕空が広がった。気持ちの良い夕方四時だ。

そして、やはり屋上に彼女はいた。俺の目的、この鞆の持ち主である榊理子（かがみあやせ）が。

肩口を越えるくらいまで伸ばされた美しい黒髪が、夕暮れの風に揺られて散っている。その光景は、先ほど俺が見とれた神楽坂観月と並べても遜色ないほど、美しい。

こちらに背を向けていた彼女は俺の登場に気がついたのか、ゆっくりとこちらを振り向き、不敵な笑みをその顔に浮かべた。

「ようジュンイチ。ちゃんと持ってきたみたいだな」

ハスキーボイスで不貞不貞しい台詞をのたまう理子。俺は半眼で彼女を見やり、口を開いた。

「ジュンイチって呼ぶんじゃないねえ。俺は絢一だ。アヤカズ。後お前、俺をデリバリーサービスかなんかと勘違いしてんじゃないやねえだろうな」

「お前なんかジュンイチで十分だよ十分。ジュンイチデリバリーサービス……、お荷物届けるのが少し遅いんじゃないの？」

ひらひらと顔の前で片手を振り、偉そうに呟く理子。

「リコって呼んだるか」

「殺すぞ」

間髪入れず、理子がこちらをぎろりと睨み付けた。俺は敵意の籠もった視線を軽く受け流しつつ、理子を視界の中心に収める。

背は俺（高校生男子の平均より少し上）の肩に頭が届くか届かないくらいだ。若干吊り目がちで切れ長な瞳に、白い肌。風にたなびく長髪は、脇道へ逸れることなくまっすぐ背まで届いている。スタイルは悪くない。すつきりとしたスレンダーな体型で、学内にフアンが多いとも聞く（信之談）。膝上までのスカート、その下からはすらりと伸びる黒タイツが見えた。……自重しろ俺、神楽坂の時

もそうだったぞ。

とにかく、外見こそあの神楽坂観月に負けずとも劣らないのが、榊理子という少女だった。しかし、一度彼女が口を開けばその幻想も即座に霧散する。

彼女の口から飛び出てくるのは罵詈雑言。しかも男口調。誰にでも遠慮がなく、サボリの常習犯。誰が何と言おうと問題児ですね。アウトサイダーとでも言うのだろうか。

そんなアウトサイダー・ガールこと榊理子は、俺の双子の妹だった。そう、血を分けたたったひとりの妹。

「何、ジロジロ見てんだよ気色わりい……」

「あ、すまん」

視線を俺から逸らし、理子が忌々しげに呟いた。その頬が若干朱く染まっていたように思うのは、果たして今が夕暮れ時だからなのだろうか。わからん。

「……ま、いいや。荷物寄越せ」

ずかずかとこちらへ向かい俺から鞆をひったくるようにして掴んだ理子は、軽々としたステップで屋上への出入り口まで向かっていく。

やがて鉄の扉まで辿り着いた理子は、こちらを振り向き、口を開いた。

「おいジュンイチ、帰らねえのかよ」

鬱陶しげに言う理子だったが、彼女はちゃんと俺を待っていてくれるのだ。

言動こそ粗暴だが、中身はいつまでも優しい妹である。いやはや兄冥利に尽きるな。

「手でも繋いで帰るか？」

「ばっ……アホが、死ねよ、バーカ！」

理子が必死に否定する。

まあそりゃそうだ。年頃の女子が男子と手を繋いで帰りたくはないだろう。ましてそれが兄であるならなおさらだ。

「さっきの仕返しと言つことかどうか？」

「死ね」

ぶつきらぼうな、理子の物言い。それでも、俺は笑みが零れるのを押さえられなかった。

シスコンと呼ばれても仕方あるまい。たとえどれだけ反抗的な態度を取られようとも、理子は俺の大事な妹なのだ。

昇降口を越え、理子と二人連れ立って校門までの道を歩く。傍らのグラウンドには、練習を未だ続けている陸上部や野球部らの声が響いている。絶賛帰宅部の俺らには全く関係ないけど。

理子は「うっせえな」と顔を顰めていた。こいつはもうどうしようもないと思う。せめて彼らの努力は認めてあげるよ。

グラウンドを越えると、校名の元になった桜並木が傍らに続く舗装路が現われる。距離にしておよそ百メートルを進めば、ようやく校門が見えてくるわけだ。

ちなみに、小高い丘の上に建てられている黎桜学園は、校門を越えた先からが地獄だ。帰りは下りなのでまだ楽だが、行きは登りのためにかなりスタミナを消費する。ここからも、丘の下に広がる住宅地や市街地が見え始めている。

「なんで平地に建てなかつたんだよバカか？」などと、文句ばかりの理子の対応は楽しいが疲れる。

「じゃあお前は どうしてここを受験したんだよ」と突っ込んだら「まー、色々となー」とどこか遠い目をして返してきた。

そういえば理子の志望動機を知らなかった。いつか聞いてみようと思ひ直したところで、俺は校門の影に人影を発見する。

理子も俺に続けて気付いたようだが、何故かその体は硬くなる。舌打ちまで漏らす始末だ。

やれやれ、本当に兄は気苦労が絶えないよ全く……。

「おーい、もう良いぞ、観月」

こちらに背を向け、それでもびくびくとこちらの様子を伺ってい

た件の人影、神楽坂観月に声をかける。

「コンマ何秒かと思うスピードで振り向いた観月は、一気に破顔した後、一気にその顔を曇らせた。」

「兄さんっ！……と、理子さん……」

「……文句あつかよ。あたしがジュンイチと帰ってちゃ悪いか」

「いえ、その……」

「まあまあ落ち着け二人とも。俺たちは家族なんだから、仲良くしない」と

不機嫌さを隠そうともしない理子に、落胆の色を隠せない観月。

この二人のフォローは大変だ。

え？ 何で俺がこんな事をしなければならぬか、だって？

「それはまあ、この、学園のアイドルこと神楽坂観月が、俺、さかあや榊紬かすの。。」

「いせつと義妹だからなんだよなあ」

義妹は生徒会長！ + P L U S 〈俺と義妹と双子の妹〉

000：プロローグ（後書き）

目指せ妹系ラブコメディ！

『義妹は生徒会長！』が装い新たに新登場でございます。

今回は何と妹二人！二人でございますよ奥さん！

しかも義妹じゃなくて双子の妹、血を分けた妹デスヨ奥さん！

当然義妹も活躍しますが、実の妹の活躍を是非是非お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9521p/>

義妹は生徒会長！ +Plus ~俺と義妹と双子の妹~

2011年1月5日11時40分発行